

# グリーンブルー株式会社

## 半世紀の経験から、未来志向の環境モニタリング保守へ

「事件は現場で起きている」

大気汚染調査の現場で、1960年代から長年経験を積んできたグリーンブルー株式会社の谷學會長には、持論がある。

それは環境モニタリング保守サービスといえども、その地域の環境データを欠測なく収集するには現場をよく知ることだという。

「環境モニタリング保守サービスは、競合他社も増え、すでにコモディティ化しています。けれどもこれからの時代に、必要なのは収集したデータから、データの背景に潜む新たな課題や現象を発見し、お客様に届けることです。そのためには、長年現場で培った測定器の維持管理業務の現場力がものを言うんです。メンテナンス技術者が現地入りした時は、測定器を設置した子局のソリューションを明らかにし、データ確定を終えます。これが ICT 時代の価値を生み出す維持管理の姿だと考えています」

### ICT だけでない、現場力で問題解決を導く

いまや環境モニタリングは、ICT ネットワークにより、測定器で収集したデータを離れた場所でもリアルタイムに管理することができる時代。各社ともテレメータシステムの開発に注力している。

グリーンブルーでも、常時監視測定局から中央監視センターへ通信にてデータを転送するテレメータシステム「EcoDas-32」を開発し、保守点検サービスを行っている。しかし測定データの精度を高めるため、現場での作業においても技術力を発揮している。

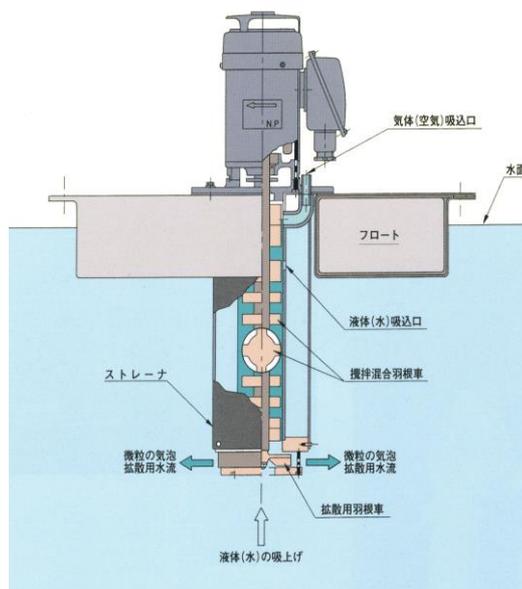
「技術者が現地入りする仕事を“重力業務”とすれば、収集したデータから問題を発見する仕事は“無重力業務”、この2つの効果的な組み合わせが重要です」

近年では夏場のオキシダントを除き、ほとんどの監視項目が環境基準をクリアしている状況だったが、中国からの PM2.5 の越境汚染に伴って、テレメータシステムの役割がクローズアップされるようになった。観測だけでなく PM 状況の調査分析などにおいても、同社は実績を重ねている。

## 「ファインバブル」という水質浄化の可能性

環境モニタリングの経験から、まったく新たな発想の事業も生まれた。水質浄化の性能を持った「ファインバブル」という気泡発生装置だ。直径 1~100  $\mu\text{m}$  程度の気泡と、ウルトラファインバブルと呼ばれる 1  $\mu\text{m}$  以下の小さな気泡を発生させることで、水質浄化などの水処理を行うことができる。

すでに秋田県の養豚場では、ファインバブル発生装置(株富喜製作所製)を導入し、豚舎内の衛生管理に役立てている。豚は病気にかかりやすく、水質汚濁や糞尿の臭いが課題であったが、この装置によって悪臭を抑えることができるようになったという。これによって薬剤も一般の養豚企業の 1/100 にまで減らすことができ、コスト節約にも役立っている。今後は、水耕栽培、養殖、洗浄、排水処理等への応用が期待されている。



左図はファインバブル吐出状況と右図はファインバブル発生装置の概要

## 会社概要

グリーンブルー株式会社

代表取締役社長：杉本健司

本社：横浜市神奈川区西神奈川 1-14-12

TEL：045-322-1011 FAX：045-322-3133

設立：1972年10月

事業内容：環境情報システム開発、環境監視測定機のメンテナンス、環境調査分析・アセスメント、環境化学分析、海外技術協力等。

URL：<http://www.greenblue.co.jp/index.html>